



人々の意識を変える方法を考え、皆が生きやすい社会を目指す

● 社会問題の解決に向けた認知心理学的アプローチ

● 人間科学部 心理・行動科学科

矢野 円郁 准教授 — YANO Madoka



男女の不平等をなくすにはどうしたらいいのか？
冤罪をなくすには？ 事故を引き起こす前に危険な行動を止められるようにするには？
私達を取り巻くあらゆる社会問題を解決するには、人々の意識改革が必要となってくる。「現状を全て肯定するのではなく、まず疑問を持つことが大切です」。人間の思考や記憶のくせ、判断のバイアスなどに関する認知心理学的研究の知見を踏まえ、問題の根本がどこにあるのかを見極め、原因を解明し、改善していくための方法を模索する矢野円郁先生に話を聞いた。

■ 認知心理学的な知見を踏まえ、社会問題に取り組む

「専門の認知心理学とは？」

社会心理学や臨床心理学など、様々な心理学の基礎となる学問で、記憶や注意、思考など、人の認知機能の仕組みを研究します。

私はもともと社会問題に関心があり、冤罪に興味を持ったことから認知心理学の道へ進みました。なぜ冤罪が起こるのかを解明するためには人間の記憶の仕組みを知る必要があります、その知識を得た上で、どのように社会を変えられるのか考えたかったのです。

「冤罪の研究から見えてきたことは？」

人の記憶は過去の経験や知識に基づいて変容するものであり、思っているよりも不正確だということが分かりました。目撃者の確信の強さと目撃記憶の正確さには関連がない、あってもごく弱いことを示した研究報告は数多くあり、目撃者がどんなに確信をもって証言している内容でも、それだけでは証拠として十分ではありません。

日本でも裁判員制度が開始され、一般人も刑事裁判に参加して被告人を裁く立場に置かれる可能性が出てきました。私の役割は、記憶の曖昧さをデータに基づいて学生に伝え、講演会等を通して社会にも発信していくこと。記憶の変容を皆が認知し、証言の信憑性を確かめられる記録を残していけば、冤罪を生む可能性を減らすことが出来

るかもしれません。最近、子どもの記憶確信の正確さに関する研究をした大学院のゼミ生もあり、その成果も役立つのではと期待しています。

■ 男女を区別しない環境を育む

現在はジェンダー意識の研究をされていると伺いました。きっかけは？

きっかけは、私自身の出産です。夫婦ふたりの時は、夫の家事分担率が低くてもそんなに不都合はありませんでした。が、子どもができると分担しな

くては仕事が出来ません。世間では、母親が家事育児をやるのは当たり前。父親は頼まれたり指示されたりして手伝い、やると「ありがとう」と言われる風潮があります。この構造を変えなければ、女性……そして、恐らく男性も生き難い。自分自身が親業と職業を両立するためにも、まずジェンダー問題に取り組まなければならない、というところですね。

「どのような研究を？」

3歳になる我が子を通して、人間の

ジェンダー意識はいつ頃から芽生えるのかを会話や実験課題で調べています。実験では、息子の成長に応じて、大きさの異なる3つの靴のイラストを印刷したカードを見せ、誰のものか尋ねます。うちは3人家族で、大きい靴はお父ちゃんの、中くらいの靴は私（お母ちゃん）の、小さい靴は息子のもの。これは2歳の時点できちんと認識していました。では色を着けるとどうなるでしょう？ 大きい靴を青、中くらいの靴をピンクにすれば即答しやすいですが、大きい靴をピンクにすると、大ききで判断するのか、色に引っ張られるのか？ 答える際に一瞬逡巡する様子など、微妙な差異も見えています。3歳の時点では、大きいピンクの靴を「お母ちゃんの」と言うことはほぼありませんでしたが、うちは夫もピンクのシャツを着ることがあるし、「男の子だから、女の子だから」と言わないようにしているからかもしれません。

日本では、男の子にはブルー系、女の子にはピンク系という色分けをすることが一般的で、保育園等でも男の子には青いラベル、女の子には赤いラベルが貼られることが多いと思います。男の子がいわゆる可愛い服装をしていると、大人から悪気なく「今日は女の子みたいね」と言われることもあります。5歳前後で「ピンクは女の子の色だから着ない」と言うようになる話もよく耳にするため、いずれは複数の子どもを対象に調査していく予定です。



子どものジェンダーステレオタイプの実験の様子

「環境によって、徐々に男女を分ける意識が生じてくると？」

さらに小学校へ上がると、算数は男の子の方が、家庭科は女の子の方が得意という雰囲気が出てきます。ですが、プロの料理人には男性が多いことから明らかなように、それは違いますよね。教育現場では先生方も様々な研修を受け、非常に忙しいことは周知の通りですが、ジェンダーに関しては不勉強な先生がいることもまた事実です。そもそも家庭科が男女共修になったこと自体それほど昔の話ではなく、教育者の多くは自身も「男女には生得的に違いがあつて当たり前」として育ってきています。学校は「男女平等の教育を」と機会均等を与える立場にありながら、男女差別を生み出す機関になってしまっており、なかなか変わりにくい状況だと感じています。



■矢野円都(やの・まどか)
博士(心理学)。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。中京大学心理学部助教、名古屋女子大学文学部講師を経て、2013年より神戸女学院大学に着任。日本交通心理学会国際交流委員会・委員、同家庭部会・委員、JAF兵庫支部交通安全実行委員会常任委員。専門は認知心理学。研究テーマは、記憶、メタ認知、リスク認知、交通安全教育、ジェンダー、貧困。著書に『時間記憶の認知心理学—記憶における経過時間とその主観的感覚—』(ナカニシヤ出版 2010)、共著に『認知心理学ハンドブック』(有斐閣ブックス 2013)、『誤解の理解 対話115例で解説するコミュニケーション論』(あいり出版 2009)など。

これは学生にも言っているのですが、「男の子は青、女の子は赤」などの当たり前とされていることを疑って欲しいのです。男女格差が少ないスウェーデンではトイレすら区別していないそうです。なるべく幼少期から区別しない環境を作ることによって、区別しないことが「当たり前」となり、違いを意識することが減ると考えられます。意識的に変える努力をしなければ、「当たり前」

り前」は変えられないでしょう。
■**児童の認知発達に即した教育で、自転車事故を未然に防ぐ**
—そのほか、昨年8月には尼崎市で開催された『自転車のまちづくりフォーラム』で講演するなど、交通事故防止のための活動もされていますね。
交通安全教育への取り組みは、応用心理学分野の助教をしていた際に上司

だった教授が携わっており、私も関わるようになりました。自転車の運転は免許を要せず、正しい乗り方を学習する機会もほとんどありません。大人になってから乗り方のくせを直すのは難しく、事故防止には子どものうちから学校教育の中で安全な乗り方を習慣づけることが重要です。そこで認知心理学分野からのアプローチとして、自転車



小学校で行った交通安全実習の様子

—**今後の展望をお聞かせください。**
小さな事では、息子に妻を困らせない男、自分のおしりを自分で拭ける人間に育てたいです。女性自身が、女性を生き難くさせる人間を作るといふ悪循環に歯止めをかけたい。そして、女子教育にあたる立場としては、女子達をもっと「自信をもって」「ステレオタイプに縛られず」「自由に」生きていけるよう励ましていきたいです。「仕事はしたいけれど、家事育児との両立は自分には無理だ」というから専業主婦になりたい」という学生がいます。それについても、家事育児分担率の男女平等化を進めなければならず、それにはやはり「区別しないこと」「当たり前を疑うこと」が大切です。最近脳科学によるジェンダー研究も進み、男女の脳は違うため、特性も異なるという意見も見られます。けれど、環境に応じて脳も変化するもので、相関が見られたとしても直接的な因果関係は言えません。違うから仕方ないで済ませるのではなく、どのようにジェンダー意識が作られているのかメカニズム的なレベルで研究を進め、皆が生きやすい社会にするために、どのようなアプローチで意識を変えていけばよいのか、データを踏まえて提案していきたいと思います。

—**それで、論文『小学校教諭におけるジェンダー意識と教科学習能力の性差に対する認識の関係—ジェンダー・ステレオタイプの再生産防止のために』を発表されたのですね。どのようなことが分かりましたか？**
—この研究では、小学校の先生がどのようなジェンダー観を持って子ども達に接しているのか、各教科の能力に対して性差を感じているのかを調査しました。その結果、小学校の先生は、一般人よりは性別の特性を信じてはいないものの、未だに強く信じている人も少なくないことが分かりました。相関分析においては、性別特性観が強い先生ほど、教科の能力に対する性差を大きく認識していました。一方で、同じ生徒を観察していても、性別特性観が弱い先生は、すべての教科に対して男女で違いがないと回答しています。つまり、性差があると信じる人には性差が「見え」「信じていない人には「見えない」。少しでも性差があると思うと、人は無意識にそれを実現する方向に働きかけ、自己成就してしまいます。そのため、教育者はステレオタイプのジェンダー観を持たないことが必要と言えます。
—**ジェンダー・ステレオタイプを持たないために、気をつけるべきことは？**
大切なのは、極力、性別カテゴリーを使用しないことです。身体測定などは男女で分けることも必要でしょうけれど、実は、殆どことは区別しなくても困らないのではないのでしょうか。